

2026 9/8

No.2266

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—



「横浜グリーンエクスポ応援 みなとみらいフェスティバル」が8月24日、臨港パーク（横浜市西区）などで行われ、約1万8千発の花火が夏の夜空を彩った。



政経かながわ

2026 9/8 No.2266

contents

視点点描	
川崎が「独立」した日	3
特集	
高市政権が直面する財政運営の隘路 異次元緩和の「つけ払い」	4
政治双眼鏡	
首相の隠れた悲願実現するか 迫る秋の人事	8
経済双眼鏡	
見栄えがする事業に資金投入	9
サヘル・ローズ×リアルワールド	
戦争の後始末を生き続ける	10
管理職はつらいよ！	
期待されたくない？ 部下	11
神奈川景気データファイル	
	12
かながわTODAY	
8月の主な経済ニュース	14

事務局だより

◇2026年9月定例講演会

9月10日(木) 午後1時30分～3時

神奈川県民共済13階大会議室
(桜木町駅近く)

講師：湘南ベルマーレ

フットサルクラブ社長

佐藤 伸也氏

演題：戦略としての地域経営

「スポーツとローカルゼ
ブラ政策」

◇2026年10月定例講演会

10月26日(月) 午後1時30分～3時

県民共済みらいホール

(桜木町駅近く)

講師：鉄道作家・ジャーナリスト

森川 天喜氏

演題：横浜駅をめぐる企業間攻防

ー 鉄道とまちづくりの歴史 ー

◇2026年11月定例講演会

11月19日(木) 午後1時30分～3時

神奈川県民共済13階大会議室
(桜木町駅近く)

講師：料亭田中家5代目女将

平塚 あけみ氏

◇2026年12月定例講演会 (シンポジウム・会員交流会)

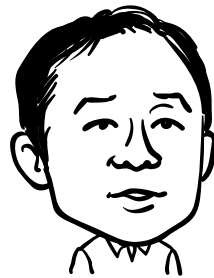
12月21日(月) 午前11時～
午後1時30分

メルヴェーユ(桜木町駅近く)

パネリスト：共同通信政治部長、
経済部長、外信部長

演題：2027年の動向を読む

視点 点描



川崎が「独立」した日

毎年恒例の「川崎みなと祭り」が10月10日、11日に川崎港で開かれる。今年は「開港75周年記念」と銘打ち、帆船日本丸が寄港し一般公開されるとあって、より多くの市民でにぎわいそうだ。

ただ、75年という数字に疑問を持つ方もいるのではないか。船は戦前から入っていたのでは、と。

川崎の臨海部は、実業家の浅野

総一郎らが興した「鶴見埋立組合」

が1913年に鶴見川崎の海の埋め立てに着手し、昭和初期に形成された。当時から民間工場の岸壁には原材料を積んだ船が着岸し、外国通商ができる開港港則も26年に適用された。ここを起点に数えれば、今年が開港100年。だが、市の考えは違う。

木村俊介港湾局長は「貿易港と

しての歩みは100年。でも本市は、市が港湾管理者となった1951年を『開港』の年としてきた」と説明する。国土交通省出身で各地の港湾施策にも関わった経験も持つ木村局長はこう続けた。

「条約や開港港則適用をもって開港とする港が多い中、川崎は珍しい。そこに理由があるんです」

川崎市史によれば、横浜港区域は23年の内務省告示で鶴見川口から多摩川口まで拡大。以降、川崎は横浜港の一部として発展した。

そして45年の終戦。他の諸改革と同様に、占領軍主導で港湾管理を国から地方自治体に移す一大転換があった。だが、川崎港の管理はすぐ決まらなかった。横浜市が川崎の分離に猛反対したからだ。

県が共同管理案を示すも、横浜市は市民大会で主導権保持を訴え、対立は2年間続く。管理主体が未定のままでは米軍による港の

接収解除が先延ばしとなるだけに、それは避けたい横浜市が軟化。

運輸大臣が川崎港港湾区域を認可し決着を見たのが、75年前だった。

市史は「川崎市は横浜港から分離独立し、名実ともに川崎港の主人公となった」「『紛争』は川崎港の『港湾自主性の確立』という形で終わりを告げたのである」と熱っぽい筆致でつづっている。

「自分たちの手で管理し発展できる港になった年。当時の思いも踏まえ、『開港』としたんでしょ」と木村局長。そう言って最後に現況の説明も忘れなかった。

「今は港の国際競争力を高めるため、横浜、東京、川崎の京浜3港はしっかりスクラムを組んでいます」。川崎独立をめぐる熱いドラマは、もう語られることも少ない歴史の一ページとなっている。

(神奈川新聞社地域共創本部

川崎統括・高本 雅通)